

---

# 狂撃隊の生活日常

izumi

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

狂撃隊の生活日常

### 【著者名】

inum-i

N8395X

### 【あらすじ】

これは僕が書いている「私たちの学園生活日常」の спинオフ作品です。この作品に出てくる狂撃隊の日常を書いたものです。狂撃隊の日常は一体どんなものなのか、ちょっと裏側を覗いてみましょう。（注：「私たちの学園生活日常」にまだ登場していないキャラも出てきます。と言つて出まくつます。）

## 口常1（前書き）

涼平「おー俺たちの小説かー。」

椎名「でもメインが逃走中だから結構な遅さですよっ。」

涼平「マジかー…。」

澪「にしてもオッドアイ多いわね。」

椎名「本当だね。」

涼平「そのこと何だが作者がオッドアイ系が好きだから、自分のオーリキキャラにもその設定をつけていんんだってさ。」

スバル「マジか…。」

狂撃隊、それは社会に見捨てられた者、行き場を失った者、仲間に裏切られた者などが集まつた集団である。

いつもは探し事や依頼などを受けている所もある。狂撃隊に所属する人数はざつと80人。

此処は、その狂撃隊達が生活を送る屯所。此処では、その狂撃隊の日常を覗いていこう。

? 「あ～… 今日も暇だな～。」

この男の名は秋神涼平。狂撃隊創造者にして局長を務める男だ。

涼平「あ～… こんな口は信童とかとゲームしたいんだけどなあ～…。」

「

いつもは自分の部屋でのんびりと過ごしている。

涼平「暇だなあ～。」

? 「いつも暇じゃないんですか局長。」

そう秋神に話しかけて来たのはスバル・アキラ。この狂撃隊の副隊長であり転生者である。

涼平「あ～スバルか。何だ?」

スバル「いや、最近なんか鈍<sup>なま</sup>つているよつた氣<sup>が</sup>して…ちょっと運動<sup>でも</sup>して体をほぐしたいんですけど…。」

涼平「お前の運動は普通の人に取つたら死に直面するだ。」

スバル「あ～…そうですね～…。」

涼平「なんかそこらへんの不良でも殴つとけ。」

スバル「へ～い。」

そう言つとスバルはどこかに行き、後から男たちの悲鳴が聞こえて来た。

スバル「さてと…依頼は来てるかなあ…。」

?「局長、誰か来てますよ?」

?「あれ友達ですか?」

涼平に一人の女性<sup>らいじょ</sup>が話しかけて来た。髪<sup>は</sup>が金髪<sup>きんぱつ</sup>のオッドアイのこの少女<sup>は</sup>は雷文寺椎名<sup>らいもんじ しいな</sup>。電氣<sup>でんき</sup>を操る少女である。

そして、髪<sup>は</sup>が茶髪<sup>さはつ</sup>でオッドアイのこの女性の名は初音涼萌<sup>はつね りょうめい</sup>。常にかなりの大きさの筆ペン<sup>ひふん</sup>を所持している。

ちなみに何でこんな名前かと言つと自分の名前の涼と萌をくつづけてそれぞれを音読みした時の一番最初の文字をくつづけた名前<sup>なま</sup>であ

る。

涼平「何だ雷文寺、初音。」

椎名「屯所の入り口になんか長髪の男性が立っているんですけど。」

涼萌「んで「誰かー、いますかー。」ってずっと言ってるんですよ。」

「

涼平「あー多分間違っているんだろう。案内してやれ。」

椎名「はーい。」

涼萌「メンドー。」

涼平「ふう…今日も平和だなあ…。」

ちなみに長髪の男性はその後、警察の方に連れて行かれました。

## 口算1（後書き）

えー最初でも言った通り逃走中がメインです。

なので更新はかなり遅いと思います。

でもそれでもここからの生活を見てくれるなら幸いです。

## 口算2（前書き）

涼平「あれ？ 2話目？」

椎名「見てくれてる人たちがいて、うれしかったから第2話目を投稿するらしいんだって。」

スバル「あー見てくれてる人たちがいるのか…うれしいなあ。」

椎名「でもなんだか逆に恥ずかしかったり…。」

涼平「ほんとだな。」

椎名「では、はじまりまーす。」

森

椎名「よつーはつー」

今、雷文寺は此処で特訓をしている。何の特訓かと言つとかつこのいポーズを取る特訓である。

涼萌「もひひょつと手を挙げた方がかっこいいと思つんだけど…。」

んでそのポーズを初音に見てもらつていてる。

椎名「こひっく」

涼萌「おーよくなつたねー。いいよー。」

椎名「ふう…今日は此処までにするか…。」

二人が帰ろうとすると…。

?「椎名ー、涼萌ー。どこにいるのー?」

誰かが一人を呼ぶ声が聞こえて来た。

椎名「あ、この声は…。」

涼萌「おーい、智ちゃん。」

この女性の名は灼西智。涼萌はさん付けで呼んでいるが歳は涼萌の方が上である。

涼萌「ん?なんか失礼なことを言われた気が…。」

智「あーいたいたー!今日あなたたちに仕事が入ってるって連絡があつたわよ。」

涼萌「へーそうなんですかー。」

椎名「んじゃ早く行こつか。」

涼萌「うん。」

?「ちよ…姉ちゃん…そろそろ…その腕離してくれない?」

智「ダメよ!絶対に努を離したりはしない!だって私は努のことが大好きだからー?」

?「離せ!ラコンバカ!!!」

今智に襟元をつかまれている男子の名は灼西努。智の弟で、智はこの弟に溺愛している。

努「俺だって自由に生活してえのに何でいつも縛られなきゃならないんだよー!」

智「それはね…努にけがとかしてほしくないから…。」

努「えつ」。

智「だからいつも私の近くにいてほしの。」

努「お姉ちゃん……。」

智一：あとはいつつも努の顔が見たいからかな？」

契  
一  
え  
？」

智一努のかわいらしい顔かしいつも見れるよにしているんだー！」

智「んじゃ帰ろうつ努？」

「椎名」

涼萌「無事を祈る...。」

椎名一不幸ですね……。

椎名「んで、仕事は？」。

屯所

涼萌「えーと…とある場所に行ってどんな所か調べるんだって。」

椎名「なんじゃそりゃ。で、どこ?」

涼萌「えーと…。」

とある工場

涼萌「此処か…。」

椎名「なんか不気味だね…。」

?「早く仕事済ませて帰りましょう。」

?「そうですね…結構不気味ですし…。」

今は4人いる。そのうちの二人はさつきの雷文寺と初音だ。そして、一人は容姿が某ゲームの半人半霊の人に似ている燐冥魄神しゆくめいぱくしんと言う難しい名前の人。ちなみに白い魂は無い。普通の人である。何回も言う、某亡霊のことは知らない。

そして、もう一人はなんだか容姿が某アニメの天使に似ている篝かがり・シードリアと言う人。背中に何故か羽があつて空も飛べる。

涼萌「じゃあ入りますか。」

椎名「うわ……気持ち悪い……。」

篝「趣味が悪いですね。」

燭冥「何だこのパイプみたいなのは？気持ちが悪いたらありゃしない。」

涼萌「しかもなんか入ってるし。」

篝「これはキノコ？」

椎名「に顔と手足が生えた？」

燭冥「……ん？」「これ、どこのゲームで見たような……。」

涼萌「氣のせいっしょー。」

燭冥「あとでサムルやシーディ聞いてみようか。メンデーだけど。ビニール。」

涼萌「そうだね、聞いてみようか。メンデーだけど。」

篝「……おい、これ人じゃないか？」

涼萌「え？」

燭冥「まさかそんな……。」

見てみると確かに人である。

涼萌「人だ…。」

燭冥「おい…ここから先はほとんど人じやないか?」

篝「そのようですね。」

椎名「でも、何のために…。」

篝「…！誰か来ましたよ！」

椎名「隠れよ…！」

？「なあ…ほんとにこんな」とするのか?」

？「当たり前だろ。」

？「人造生命たちを戦闘人にして此処を制圧するための武器にするつて。」

4人「！…！」

？「まあ、こいつらなんかいなくともできるとは思つけどな。」

？「そうだよな。」

篝「おい…。」

？・？「…？誰だ！？」

篠「その話…じつくり聞かせてもらおつか…。」

涼萌「手加減はしないよー？」

燭冥「私の手にかかればあなたたちは簡単に地獄の門をくぐれます  
が？」

椎名「久しぶりに…暴れられるね…。」

「 篤一 検査、決してこいつ等（バイブに入っている奴ら）に危害は加えるなよ。」

椎名「分かつてゐる。」

？「ちよ、侵入者だ。死ね。」ぐわあああ！！！！！」

バタツ

?

燐冥一  
安心しろ、死なない程度に攻撃してある。

涼萌「じゃあ……やる?」

## 権名 - やうめい

篭 - キツノホウ - (1)

涼平「轟ー。あいつら遅いなー。」

零「そうよね…。断り道してるんじやないかしら?」

涼平「あーそつか。」

## 日常2（後書き）

椎名一

んで今回は、セマイン#ヤラかたし、ソノヒタモ

スバル「何の?」

狂騒隊の

卷之二十一

ます秋神涼平だろ？あと雷文寺椎名、轟澪、スバル・アキラ、初音涼萌、灼西智、灼西努、燐冥魄神、篝・シードリア、サムルとシード。

椎名「たくさんいるね。」

後此處に2つ4人が加わればメインキャラがそろう。

椎名一  
ふ  
ん

じゃあ感想待ってるぞい！

椎名「何その某ペニギン王様みたいな口癖ー！」

## 江崎さ（眞理也）

涼平「今回やつと本論でも戻してくるアーティストが出来た。」

椎名「でな、アーティスト。」

椎名「あー…いい物買つた。」

？「本当よね~。」

この一人は今、街に来ている。

そのうちの一人は雷文寺椎名。もう一人は轟澪じどりみゆといい、狂撃隊のメンバーからはドS巫女みやこというあだ名が付けられている。ちなみに雷文寺とは息のあつたコンビである。

雷文寺が買つたのは主にカメラや衣装。意外とアニメキャラのコスプレが趣味である。ちなみにコスプレをさすのも趣味である。

そして、轟が買つたのは人を痛めつけるために買つた鞭や、これを食べた人の苦しむ顔が見たいと言う理由で買ったハバネロや、縛つて動けなくする繩や、人の恥ずかしい秘密を書きとどめるノートやペンなどどうらしい物を買つている。

澪「次はどこに行きましょうか。」

椎名「えっと…此処が良いなー。」

澪「じゃあ行きましょうか。」

椎名「うん。」

スバル「ポーケーモーー言えるかなー？」

？「何歌つているんですか…。」

スバル「聞いて分からぬいか？新バージョンの言えるかなだよ。」

？「歌詞全然違いますから！あとそれ以上歌うのやめて！この小説  
消される！抹消される！永遠の闇に投獄される…！」

スバル「大丈夫だろー少しぐらい。」

？「全然大丈夫じゃねえええ！…！…！」

今突つ込んだのはシード・ポルノグス。髪が植物になつていて人造  
生命体だ。

スバル「なんか知らんけど世間ではいろいろ騒がしいな。」

シード「まあたしかにいろいろありますからね…。」

と、そこに…。

？「あれ？何してんの？」

スバル「あ、クルス。」

前からやつてきたのはクルス・パートリア。涼萌の名字の女性の姿  
から髪を下したような姿をしている。そして、大のゲーム、アニメ  
好きである。

スバル「今日の収穫はどうだった?」

クルス「うん!よかつたよ!お田端のものも手に入つたし!…」

スバル「そうかそうか。」

クルス「じゃあ先に帰つてるから!」

スバル「おー、氣をつけて帰れよー。」

?「あらあら、こんな所にいたんですか。」

?「お呼びですよー。」

?「何してんのよ…。」

人込みから3人の女性が出て来た。

一人はサムル・ニヤール。頭に猫の耳が生えている人造生命体。もちろん耳はつけ物ではない、実際に生えている。そして、尻尾もある。

もう一人は左目に眼帯をしているプレミア。彼女の周りは常に肌寒く、氷系の技が使える。ちなみに眼帯をしている理由は左目は何かも紋章的なものだかららしい。（ちなみに雷文寺にもあります。右手の甲にあります。）ちなみに紋章的なものはしっかりと田の機能はある。

そして、最後は某人気アニメの主人公にそっくりな小萌すずか。性

格は某キャラとは違い、その某キャラの友達であるツインの双子の姉にそつくりなツインテレである。（クルス曰くツインテレ最高らしい。）クルスはある意味良い仲。

スバル「及びだつて？誰に？」

フレミア「同長つすよー。」

すずか「なんか友達が来ているから来いだつて。」

スバル「ふーん…んじゃ行くか…。」

シード「帰るの？」

スバル「あつたりまえだろ。出で来いーーー。」

ポンー！

スバル「じゃ、なんかあつたら報告な。」

フレミア「分かりましたー。」

涼萌「絵を書くのは楽しいなー。」

屯所では初音が絵を書いていました。

## □章4（前編）

スバル「レギュラーついにやめたのかな…？」

フルーテ「やあ。」

商店街

現在狂撃隊のうちの何人かは商店街にいる。理由はなんか暇なので近くの商店街を見に行こうってことになったのだ。

涼萌「なんか適当な説明が流れたような気がしたけど。」

涼平「それは奇遇だな。実は俺も思ったのだ。」

椎名「私もです。」

？「わたしもー！」

？「…。」？金髪の子を見つめて鼻血を垂らしている。

知らない人がいるので説明しよう。

一人は某人気アニメの黒髪の子にそっくりな秋神涼<sup>あきかみ よう</sup>。涼平の妹だ。

もう一人の鼻血を垂らしている人は秋神涼音<sup>あきかみ すずね</sup>。涼平の姉だ。ちなみに姿はシ○○ムにそっくりである。

涼音「あはは…なんかもうこのまま逝つてもいい気がする…。」

涼平「お姉ちやーん……もつもつと生れて……なるべく生れて……！」

涼「どうしたのお姉ちやん……。」

パアアアア……。

涼音「ブハア……？」鼻血が思いつき出した。

涼平「お姉ちやあああああああああああん……？？？」

涼「ええええええええ……？？」

スバル「ギャグじやん。」

涼萌「そこ突っ込んだらアカンよ。」

澪「あんなー私はこんなグダグダ漫才を見に来たんじゃないのよ。もつとチャキッとした漫才見せてーな。」

椎名「何故エセ関西弁！？」

シード「そして漫才じやないよ。」

フレミア「つてかこのメンバー多すぎない？なんか周りから結構見られてる気がするんだけど……。」

サムル「気のせいですよー。」

スバル「絶対に多分じゃないぞ。」

智「努（つと）めがさないわよ」  
：

？「みんな……待つて……。」

このからだの弱そうな女の子は卓星美海。<sup>たくほし みみ</sup>体が弱く、基本的には車いす移動だが、今回は歩いて行くと自分で言い張つたのだが案の定の結果になつた。

スバル「しょーがねーな」。

そして、スバルが美海を背中に背負つた。

美海「あ、ありがとうございます。」

？「だから無理するなって言ったのに。」

この子は海風姫花。<sup>うみかぜ ひめか</sup>涼平もよくわからないらしいが自分のことを人魚と言い張っている。多分とある作品の羽〇〇小鳩と同じと言っている。（涼平談）

姫花「だーかーらー本当なんだつてばー！」

椎名一な、何に向かつて言つてるの？」

? 「そんな馬鹿はほつといて楽しもうじやないか雷文寺。」

んでこいつはアリシャア・Ｋ・Ｋ・フロールスキイ。（アリシャア・

カマンベール・カムイ・フロールスキー）見た目は普通の女子だが  
実は吸血鬼で現在1000歳以上らしい。ちなみに吸血鬼の苦手と  
されるにんにくや日光、十字架は平氣である。

アリシアア「なんかここつて言われた気がしたんだが…気のせい  
か？」

フレミア「あと何か名前少し変えられてるしね。（アリシアアだつた  
所がアリシアアになつてるし。）」

篝「ほんとですね。卓星も。知美さとみだつた所が美海になつてますから  
ね。」

アリシアア「？」

美海「何の」と…？」

スバル「おひおひ、ボーッとしてるとけがすんぞ。」

アリシアア「つるせい。」

スバル「何だと？」

アリシアア「つるせいんだよこの無駄脂肪…！」

スバル「ああ…？自分にないからつてやつあたりつてか…？無い物  
ねだりか！？」

フレミア「ちょ、ケンカはよくないよ…。」

アリシア・スバル「うるさい！！！」

アラビア文書

涼平「どうぞ」。

アリシャア・スバル「馬か！――！」

涼平「仲良へ。」

アリシャア・スバルー「ふん！！」

テレッテレレレ...

アリシア／ル・スバル・マコガ!!!

篳・長谷川さんですか？」

アリシヤ 万 運二郎

# スバル 何でここで○魂！？

その後、いろいろ楽しみました…。



## 口常4（後書き）

次回、狂撃隊メンバー確認。

皆「????」

## 狂撃隊メンバー（前書き）

サブタイトル通りです。

でも結構？？？で埋め尽くされています。

（メインメンバーには名前後にメインとつけておきます。）

## 狂撃隊メンバー

狂撃隊メンバー

? 1 秋神涼平 メイン

? 2 秋神涼平 メイン

? 3 秋神涼音 メイン

? 4 ???

? 5 ???

? 6 ???

?  
1  
4

?  
?  
?

?  
1  
3

?  
?  
?

?  
1  
2

?  
?  
?

?  
1  
1

?  
?  
?

?  
1  
0

?  
?  
?

?  
9  
?

?  
?  
?

?  
8  
?

?  
?  
?

?  
7  
?

?  
?  
?

初音涼萌  
メイン

? 2 1	? 2 0	? 1 9	? 1 8	? 1 7	? 1 6	? 1 5
? ? ?						

?  
2  
9

?  
?  
?

?  
2  
8

?  
?  
?

?  
2  
7

?  
?  
?

?  
2  
6

?  
?  
?

?  
2  
5

?  
?  
?

?  
2  
4

卓星美海  
メイン

?  
2  
3

?  
?  
?

?  
2  
2

?  
?  
?

?  
3  
0

?  
?  
?

?  
3  
1

?  
?  
?

?  
3  
2

?  
?  
?

?  
3  
3

?  
?  
?

?  
3  
4

?  
?  
?

?  
3  
6

?  
?  
?

?  
3  
5

アリシア・K・K・フロールスキーメイン

メイン

?  
4  
4

雷文寺椎名

メイン

?  
4  
3

?  
?  
?

?  
4  
2

?  
?  
?

?  
4  
1

?  
?  
?

?  
4  
0

?  
?  
?

?  
3  
9

?  
?  
?

?  
3  
8

?  
?  
?

?  
3  
7

?  
?  
?

?  
5  
1

プレミア  
メイン

?  
5  
0

?  
?  
?

?  
4  
9

?  
?  
?

?  
4  
8

?  
?  
?

?  
4  
7

?  
?  
?

?  
4  
6

?  
?  
?

?  
4  
5

轟  
澪  
メイン

? 5 2

? ? ?

? 5 3

? ? ?

? 5 4

? ? ?

? 5 5

? ? ?

? 5 6

スバル・アキラ メイン

? 5 7

クルス・パートリア メイン

? 5 8

小萌すずか メイン

? 5 9

篠・シードリア メイン

? 6 0  
???

? 6 1 シード・ポルノグス メイン

? 6 2 サムル・ニャール メイン

? 6 3  
???

? 6 4  
???

? 6 5  
???

? 6 6

海風姫花 メイン

?  
7  
4

?  
?  
?

?  
7  
3

?  
?  
?

?  
7  
2

燭  
真  
魄  
神  
メイン

?  
7  
1

?  
?  
?

?  
7  
0

?  
?  
?

?  
6  
9

灼  
西  
智  
メイン

?  
6  
8

灼  
西  
努  
メイン

?  
6  
7

?  
?  
?

スバル「多すぎないか…？」

## 狂撃隊メンバー（後書き）

次回は普通の日常に戻ります。

## 口常5（前書き）

何故か平日に更新。

土曜参観のせいで代休になつたのだ。

屯所

スバル「えーお前らー。今から勉強を始める。」

椎名「しつかりと聞くんですよ。」

澪「先生はスバル副隊長、んで補佐は私たち第一課隊長の雷文寺隊長と私、第二課隊長の澪隊長が務めさせていただきます。」

涼萌「えー…メンドー…。」

スバル「そー。殺られたくないならしつかりと聞け。」

涼萌「はい。聞かせていただきます。」

フレミア「(脅しじゃん…。)」

スバル「今回はコンビニ前にいる不良たちの対処法について勉強を始める。」

姫花「不良ですか…確かに怖くて近づきたくないんですよね。」

クルス「絡まれた時の面倒をと言つたら…。」

スバル「その時に役立つことを今から教えてやる。」

みんな「わーい！！」

スバル「まざもし不良がいたら…目線を合わせずに無視をするのが一番だ。」

美海「なるほど…。」

スバル「で、もし絡まれたら…。」

フレミア「絡まれたら？」

スバル「まずは無視。そこで殴りかかってきたら相手の拳を避け、腹に一発パンチ、んで股に足蹴り一本したら後は好きに殺れるぞ。」

美海「途中から殴りかかっているんですけど…？」

スバル「大人數で攻めてきたら技を使って払いのけるのが一番だ。」

クルス「それ魔力を使つた技を使える人しか無理ですよね…？つてかスバル副隊長や椎名隊長とか轟隊長とかアリシャアとかこいつ（フレミア）とか籌とかにしか無理ですよね！？」

フレミア「今…こいつて言つたよね？今言つたよね…？タコ殴りに合わせてやるうか…？」

スバル「そんなことは無い。普通の人でもジ○ス○ウエ○を複数個使えばOK。」

クルス「普通の人は持つていませんけど…？」

椎名「道具店の佐藤さんに頼めばもうりますよ。」

涼萌「誰だよー?」

澪「私なら力の強い人にしか興味無いからあんなくそ共は眼中にはいわ。」

椎名「黙りなさい戦闘狂。」

スバル「と、言つわけで勉強は此処まで。しつかり復讐しろよ。」

クルス「できませんけどーーあと復習の字が違いますけどーー。」

フレミア「…ぐちやぐちや…。」

## □章5（後書き）

滅茶苦茶になりました。

次回もあひやくひやに？

スバル「わやんと書けーー！」

## 狂撃隊の仕組み（前書き）

狂撃隊の関係とかどうなつているか書いていなかつた。

と、書くわけで今回書きます。

## 狂撃隊の仕組み

狂撃隊の仕組み

狂撃隊の管理責任者 局長 秋神涼平

隊長をまとめる副隊長 副隊長 スバル・アキラ

その下は五つの課に分けられており、その一つ一つの課をまとめるのが第〇課隊長

ちなみに第五課は一人いる

第一課隊長 雷文寺椎名

第一課隊長 轟澪

第三課隊長 アリシャア・Ｋ・Ｋ・フロールスキー

第四課隊長 燭冥魄神

第五課隊長 秋神涼音 箕・シードリア

あとはそれぞれに所属する隊士

判明しているキャラで所属しているキャラ

第一課所属 初音涼萌 阜星美海 クルス・パートリア 小萌すず  
か 海風姫花

第一課所属 プレミア シード・ポルノグス

第三課所属 秋神涼

第四課所属 灼西努 灼西智

第五課所属 サムル・ニヤール

こんな感じになっています

## 狂撃隊の仕組み（後書き）

スバル「次回は普通の日常らしい。」

## 能力・技（前書き）

涼萌「今日は日常じゃないよー。」

## 能力・技

涼萌「所でさー。狂撃隊の皆がどんな能力を持つているかどんな技を使うか知りたい?え?知りたくないって?そんなこと言わずに見て行こうよ。まずは局長からだよ。」

秋神涼平

能力

『幻覚・幻聴を相手に見せる能力』

技

無し

能力

涼萌「局長は能力だけなんだよねー。まああれ無茶苦茶やばいんだけど実際には…次はスバル副隊長だよ。」

スバル・アキラ

能力

無し

技

静寂の鼓動…手から魔力のビームを打ち出す技。

雷電の怒り…両手から電気を放電させる技。相手をしびれさせて動けなくなる。

精神の破壊…目があつた相手の精神を破壊させる。破壊された相手は一ヶ月間元に戻らない。

破滅の呪文…相手に向かって何かを唱える技。数秒たつと唱えられた相手の周りが大爆発する。

涼萌「怖っ！えーと続いては私でーす。」

初音涼萌

能力

『どこでも絵を書ける能力』

『絵を実体化させる能力』

技

完全コピー…相手の技を完全に再現できる技。

涼萌「どう私？能力が2つもあるんだよーすこいでしょー？続いてはプレミアです。」

プレミア

能力

『冷気・氷を操る能力』

技

冷波…冷気の波を打ち出す技。当たった所は凍る。

絶対零度…相手を一瞬で凍らす技。

冷凍地獄…相手を凍らす技だがこの技の氷は1000度の炎でも溶けないし、かなりの頑丈さを誇る。しかもかなり冷たい。四ヶ月後経てば溶ける。

涼萌「うわー…絶対に凍らせたくない…あと能力がチ○ノと似

ているのはあんまり言わないで…次は雷文寺椎名隊長です。」

雷文寺椎名

能力

『電気を操る能力』

技

電気の弾丸…電気の塊を打ち出す技。使う魔力が小さいので連續で打ち出すことが可能。

雷…空から雷を落とす技。しかも相手を追跡する。

雷電鳥…体に電気を帯び、ものすごい速さで移動する技。

涼萌「名前からわかるとおり、電気関係の技が多いです。次はドS巫女です。」

轟濤

能力

『式神を呼び出す能力』

技

不明

涼萌「技不明って…何でだろ?…次はチートの噂がある篝さんです。」

篝・シードリア

能力

『相手の能力・技を完全に把握する能力』

技

自身向上…自分の能力などを上昇させる技。身体能力も格段に上がる。

魔力流出…相手の魔力を自分のものにする技。

炎の疾風…炎をまとつた風を起こす技。

スケルトンウォール…見えない壁を作る技。かなりの強度。

受け流し……相手の攻撃を受け流す攻撃。ただし複数の技を受け流すのは不可能。

酸素欠乏……相手の周りの酸素を無くす技。

涼萌「技多いな……。最後はアリシャアです。」

アリシャア・Ｋ・Ｋ・フロールスキー

能力

『空中を飛べる能力』

『吸血鬼にした相手を操る能力』

技

紅真の光線……紅色の光線を出す技。当たると石化する。

魅惑の眼……目があつた相手を自分の思うがままにできる技。

ポイズン液……口から毒を含んだ液を飛ばす技。かなりの猛毒。

ブラッドローズトルネード……紅真の薔薇の花びらが舞う巻き起こす技。この技を使ったあとは辺り一面が血に染まる。

涼萌「以上で終了でーす。次回からは本当に戻りますのでー。」

能力・技（後書き）

スバル「俺もうちょっとあるぞ。」

アリシャア「私もだ。」

プレミア「私もありますよ？」

涼萌「そうなの！？」

日記 (前書き)

見てくれる人が少ない。一回一日〇つてこともあつた。（実話）

スバル「当たり前だろ。」

「プレミア「これ」一次創作なのに、アニメとかゲームのが出ていないってことが…。」

スバル「そうゆう見解？」

どこの工場

涼平「『不良をなんとかしてください』という依頼が来たのでその工場に4人で来ました。」

スバル「今日は思いっきり暴れていいいんだな?」

涼平「工場を壊さない程度でね。」

カレミアーはいほいあほなこと行つてないで行きますよー。

涼萌 はい。

スバル ちよ 待てよおい！！

工場内部

スバル「あー……こりやー多いな……。」

涼平「多いな。」

不良1 「あ? 何だテメエら?」

涼平「今すぐ此処たちのいてくれないかな?」

不良2「はーはっはーー立ち退くわけねえだろバカがあーーー！」

スバル「ほー…んじゃやるしかないな…。」

## 不良3 「やるつてのか?」

スバル「来たぞ！」。

涼平「こんぐらい何つてことないさ。」

## 不良「おひるー！」

涼平「殴りかかるならちゃんと考えて殴った方が良いよ? ほら。」

ガ  
ツ

不良かな、受け止めただとお！？

涼平「ほりよ。」

ドゴオオオオ！！

不良「女なんて関係ねえーーー！」

スバル「女……？お前言つたな……。」

## 不良「は？」

ドガアアアアアアアアアン！！！！！！！！

アリシャア「あ～… もう先にやつてるな…。」

「お、楽しもうよ。」

？「そうだな。」

？」「精氣不味 そうなやつらばつかだね。」

アリシャー 行くぞ、靈文寺椎名、藤巣神井、ミント・ローズ!!

椎名 はい！！

紳士「おう！」

ミント「久しぶりにやつちやおうか」

なんか新しいメンバーが出て来たので紹介。一人はは藤曇神士。顔が女顔で髪もロングにしているので（頭にクセ毛が一本）女と間違われやすいが、実際は男である。能力は『影を操る能力』。

もう一人はミント・ローズ。言っていることから分かるとおり、サキュバスである。性別は女で外見は高校生ぐらいの背丈で髪は腰まで届いているロング。能力は『魔力を吸い取る能力』。

神士「俺ついでっぽいことを言われたような気が…。」

ミント「私もよ。」

椎名「気のせいだよ。」

スバル「はつ…！」

ドゴオオオ…！！

不良「ギャアアアアア…！」

フレミア「凍れ！」『冷波』…！」

ピキイイイイ…！」

不良「ちょ、凍つたあああ…！」

涼萌「ダイナマイドを実体化～」

ポンポンポン

## 不良「ダイナマイト！？」

涼萌「爆破」

アリシャア「うえつ…」いつ等の血、絶対に吸いたくない！」

「アヤシイって思ってた?」

アリシャア「なんだミント。ここからの精氣でも狙つているのか？」

「いや、あなたやつらの狙うわけ無こわよ。あなたも血を狙つてい  
るの?」

アリシャア「いやちだつて同じだ。狃う」と無い。」

ミント「久しごとにやるぞ～！」

アリシアア「はあ……。」

10 分後

涼萌「こいつで最後かあ？」

椎名「やる?」

涼萌「やるでしょ~。」

不良「あ…ああ…。」

涼平 一  
んじやるか、みんなで

ナレニアー もあれ覚悟はできてる?」

不良 - ああああああ

涼平「依賴完了」

口算6（後書き）

日常へに続く。

## 口輪アーチ（前輪アーチ）

また新キャラが出ます。

スバル「あー… 今日も平和だなー…。」

「権名—そうですね—」

第十一章 おおあがん

スバル：またあし一二か

一人が向かつた部屋は、煙がもくもくと出ていた。

スバル「おーい、何してんだー？綺羅星ー？」

？——やつたね……けほ……お姉ちゃん……」ほい……。

この見た目がそつくりな二人は綺羅星初と綺羅星純。  
関係で初の方が姉である。

二人は狂撃隊屯所の実験室でいつも薬を作っている。そして、薬の効果は絶大である。（まあすべて気持ち悪い色をしているが…。）

能力は一人とも無い。

スバル「また薬を作つてたのかよ…で、今日は何を作つていたんだ？」

初「ふふふ…聞いて驚かないでよ…これ！」

スバル「…？いつものように『気持ち悪い色』をしているが…？」

初「実はこれはね…『幽体離脱ができる薬』なのだよ！…」

スバル「へえ…幽体離脱ね…つてええええええええ…！…！…！…！」

いつもは『風邪が治る薬』とか『痛みを和らげる薬』を作つてるのでこの薬を作つたことはかなりの驚きのようである。

初「この薬を飲むと一体から一定時間魂が抜けだして、自由に動けるようになるのだー！」

椎名「それってすごないですか！？ノーロルもんじゃないですか！」

純「で、魂の体で他の人の体に取り憑いたりすることもできるのだー！」

初「ま、実際には取り憑くじゃなくて体の中に入り込むって言つ表現が正しいけどね。」

スバル「…つてか何でこの薬を作つてたんだ？」

初「うん、なんか男の人に頼まれて作つてたんだ。」

スバル「それは渡したらダメええええええええ！」

椎名「その人変態ですよ！？渡したら大事件につながりますって！」

初「あ、そーか。んじゃ此処に保管して、その人に無理でしたって伝えとくから。」

スバル「うん！それがいいね！」

その後、無理だつたと伝えました。

スバル「しかしここにあると危険だな…どこかの世界の人にでも送つとくか？」

## 口算7（後書き）

またまた騒がしく…。

## 口演8（前書き）

今回の話は途中から路線から脱線します。

ビニカの森

スバル「えー今からー強化合宿を行つ。」

椎名「しつかりついてくるんですよー。」

篝「遊ぶのは無しからな?」

フレニア「で、何でここ何ですか?」

篝「森の中は自然の訓練場だ。いつでも修行ができる。」

涼萌「え〜やだよ〜。」

涼平「ちなみに夜は近くのホテルで休むからなー。あ、そつそつ。」

「

涼平以外「?」

涼平「あそこ幽霊が出るって噂があるんだよなー。304号室に女子の双子の幽霊が出てくるって噂が…。」

スバル「さよ、局長…? 齧かすのはいい加減にしてくださいよ…?」

フレニア「そそそそんなのいいいいるわけないじゃないですか

…。」

篝「フレーミー、動搖しそうだ…。」

涼平「んじゃ、もううつわけで、頑張ってね。」

全員「…。」

スバル「…はつ…」

どかあああん…!…!

スバル「ふーつ…よし、これで108個目だな…。」

涼萌「ミ○ル○の体重とかと一緒にですね。」

スバル「今言つことじやないだろ。」

篝「はつ…よつ…」

椎名「…スンゲー…。滝に切れ目が入つてゐ…。」

篝「これでも本気だしてませんが?」

椎名「マジかよ…」

やつぱりチートじやねえの?」

アリシャア「……あ……もうすぐ夜だ……私の活動時間だ」

ミント「んじゃ、そこらへんで遊ぶ？」

アリシアア「よし、行こう。」

## ホテル

燭冥「いい所ですね！」

涼萌「うわ~。」

涼平「な？」

スバル「んじゃ、部屋分けしてあるから… それぞれ分かれて！」

全蜀 - 五 - 一 - . .

深夜

クルス「ううん…今何時だろ？」「

スバル「今から深夜1時だ。」

フレミア「此処は確か……！」

ガクガクガクガク……。

スバル「どうした？」

フレミア「あの……此処……304号室何ですナゾ……。」

スバル「え？」

クルス「ちょ、んじや……幽霊……。」

スバル「んんんんなもん嘘だつて！だつたらあいつがいるだろ……！  
昼間撮つた写真で証明できるし……！」

クルス「そ、そうか……！」

スバル「お、おー……舞善寺……。」

？「はい、何でしようか？」

壁をすり抜けたのは舞善寺幽子。死んだ人、つまり幽霊である。

スバル「お前……幽霊探知機とかできるか？」

幽子「何そのダウジングマシンみたいな名前のやつ……いや、氣配はしま「ガサツ」……何してんですか？」

スバル「いや、ちょっと……タイムマシンを探して……。」

幽子「ないですよ。」

朝

幽子「出ませんでしたよ？」

スバル「そ、そうか… ありがとうな。」

涼平「帰るぞー。」

屯所

スバル「ほら、部屋で撮つた写真だ。」

クルス「どれどれ……。」

写真を見るとふすまの隙間から4つの目が覗いていた。

次回、誰が出る？

## 口語9（前書き）

前回まで来たあれが出来ます。

スバル「よ、よおー…テメエら…。」

椎名「あれ? 元気ないですね副長。」

スバル「いやな……。」

？  
——おーお姉さんの友達多いね——  
。

椎名一

目の前に男の子と女の子の幽霊が二人。 (今喋ったのは女の子の方。)

「クルス」で、あのホテルの幽霊2人が付いてきたって言うの?」

スバル「そ、そういうわけだ……。」

? 「私は唐草雲雀でーす！」

? 「僕は唐草炎です。」

澪「何で女の子が僕って言つてゐるの？」

炎「いや、僕男なんですけど……昔つから女顔のせいで女の子って間違われているんですけどね。」

権名で、どうすんの?」

スバル「いや、さつきな、人形一つ頼んでおいた。こいつ等の器代  
わりになると思う。」

## 権名 - そうすか

ピンホーン

スバル お 来た来た

送られてきたのは2体の女性の人形だった。

スバル「じゃ、どうぞ。」

炎 待てえええええええええええい！！！！！！！！！！

スバル「どうした？」

炎「何で女性の人形だけなんだよ！…どっちか男性のでいいだろ！…何で女性だけなんだよ！…」

スバル「いや、頼んだんだけどな、男性の方が無くてな、仕方なく

頼んでおいたんだ。

炎「それなら後日頼むとかしておいてくださいよーー。」

スバル 女顔だから問題ないだろ。

炎 - そんなん問題すか! ?

雲雀、え、炎ど、せ、もかわいしゆ？」

んで、その後……。

雲雀「注目！」

椎名「何でふの〇〇ちゃんの台詞真似してるの?」

雲雀一同じユーレイだから、テス！」

椎名「そうゆう」と? しかもなんか喋り方も似て来た!!」

炎 - マジで恥ずかしいよ...」

「なれど、金へ運びわざ」

炎「本当に嫌なんだけど、マジで恥ずかしいんだけど、！！」

雲雀「まあまあ、かわいいからいいじゃん。」

ノリのいいコーレイと照れ屋な幽霊が仲間になりました。

口算9（後書き）

口算10へ続く。

スバル「まだまだオリキャラ出るな!ついでに…。」

で、今回はクリスマスに向けてのネタ。

まだ早いですがどうぞ！

スバル「おーい、そろそろあれの準備しないか?」

椎名「何ですか、あれって…。」

スバル「決まっているだろ、クリスマスのツリーだよ。」

澪「あーもうそんな時期なのねー。」

スバル「早いとこ置つておいた方がいいと思つんだ。」

椎名「そうですねーじゃあ行きましょーか。」

雲雀「何々～買い物～？私たちも行くよ～！」

炎「じゃあ…僕も…。」

デパート

スバル「もう出でているぜ…。」

椎名「じゃあ分かれて探しましょーか。」

雲雀「何がいいかな～あつ～これがいいかな？」

炎「それ…リ○ク…ってかゲームを探しに来たんじゃないんだけど…」

雲雀「ホタテ屋？」

炎「二〇動かよ…！」

雲雀「そして俺擊墜…！」

炎「もうええわ…！」

スバル「このレースなんかいいんじゃないかな？」

椎名「いいんじゃないんですか？あとその綿とか…。」

スバル「そうだな…買つておくか…。」

スバル「お前らーなんかあつたか？」

雲雀「いいのー？無いよー。」

スバル「ゲーム探してると大体は予想できたが…こいつなつたか…まあなんか買つてあげてもいいか。何が欲しい？」

雲雀「あ、今はいいや。」

スバル「え、何でだ？」

雲雀「サンタさんから…ほしいからそれまで我慢する。」

スバル「そつか…分かつた。それまでな。」

雲雀「うん！」

スバル「あつ…。」

炎「雪…。」

椎名「見たことはあるんだ。」

雲雀「うん…いつも私たち二人だけでしか見てなかつたけど…お姉ちゃんたちみたいに優しい人と一緒に見るのは初めてなんだ…。」

スバル「そつか…じゃあ手つないで帰ろうか。」

雲雀「…うん！」

スバル「お姉ちゃんもだよ～。」

雲雀「お前のお手暖かいな～。」

炎「…。（ドキドキ）」

椎名「ほら、顔じつちに向けて。」

幸せな…クリスマスになりますように…。

口常10（後書き）

スバル「1週間ぶりだな。」

そうですね～。

口演1-1（演書）

シリアルっぽい？

スバル「今回シリアル物か？」

それはこの小説を読んでから。

はあ……はあ……はあ……。

私は今、光り輝く月夜の中を逃げている。

私は逃げなければならぬ。

私は生きるために逃げなければならぬ。

? 「 … 」

タツタツタツ…。

女性「はあ……はあ……！」

追いかけてくる…どれだけ走っても追いかけてくる…。

嫌だ…死にたくない…！

? 「 … 」

女性「はあ……！」

? 「見つけた。」

見つかった…追いつかれた…でも…諦めるわけにはいかないんだ…！

？「往生際が悪いな～君何したかわかつてんの？」

女性「あ、あれば仕方なくやったのよ～あいつが…あいつが…」

？「でも…人を殺すことは…悪いことだよね？」

女性「うつ…。」

？「そんな君には…永遠の眠りと永遠の苦しみを…」

バアアアアーン！――――――！

そこからあたりに血が飛び散った…。

女性を殺したそいつは返り血を浴びて、嬉しそうに笑っていた…。

カンカン！

スバル「はい！カット！！この調子で次も頼みますね！」

え？何してるかって？なんかみんなでドラマを撮ることになつたんだよ。

しかも専用スタジオ使つてる（笑）。

涼平「あ～…疲れた…。」

プレミア「局長演技すごかつたですね～。」

涼平「そつか？プレミアもよかつたぞ～。」

プレミア「いえいえ…。」

椎名「はい、休憩入りま～す。」

智「はい、お水です。」

涼平「お、サンキュー。」

智「びつべ。」

プレミア「ありがと～。」

澪「次あちらのスタジオで撮りまーす。」

涼平「はーい。」

神士「おー、この小道具ちょっとかけてるΔ。」

ミント「え?…あー本当ですね。誰か新しいの持つてきてくれませんかー?」

サムル「わかりました~。」

シード「これどうする~?」

アリシャア「それは…置いておいてくれ。」

シード「はーい。」

努「本番始まりまーす。」

フレミア「あ、はじまりますよ。」

涼平「よーし、もう一回張りてくれるかー!」

## 口演1-1（後書き）

ついでドラマ撮影でした。

つか何で専用スタジオ持ってるんだよ。

## 口常1-2（前書き）

秋なので。（もう一ヶ月だね。）

前にクリスマスのネタがあつた事は無視してください。

山

涼平「おーい、今回はこの山の中で自由行動だ。この山には秋の味覚がたくさんあるから取つて食つてもいいぞー。ただ毒キノコには気をつけろよなー。」

全員「はーい。」

涼平「じゃ、自由行動!」

スバル「おー栗だー。」

椎名「たくさんありますねー。」

フレニア「自然のものっていいですね~。」

ミント「?大きなのがある…。」

アリシアア「う~む…」つや飛び越えていくしかないな…。」

その時…。

?「セーの…。」

岩の向こうから声が聞こえて来た。

アーリンガードの姫ひで。」「

バカアアアアアアン！！！！！！

岩が粉々に砕け散つた。

アーティスト：アーティスト！

卷之三

鍵宮「すいませ～ん。」

また新しいのが出て来たので紹介。こいつは鍵宮愛夢。手の力がハンパなく強い奴である。あと少し腐女子でドMで携帯を手放せない性格であり、今も携帯を離さず持っている。

鍵宮「いや～ちょっと邪魔だったもんで。」

アリシャア「だからって壊す」とは無いだろー。」

鍵宮「あ、今のソ○ソ○ーに…。」

アリシャア「殺したろかああああーーーーーーーーーー（怒）」

燭冥「これは…キノコか？」

? 「ちょっと調べますね… あ、これ毒キノコです。」

燭冥「そうか。済まないな。」

？「べ、別にあんたのために調べてあげたわけじゃないんだからね！」

もう一人、出て来たので紹介。この少女はチャーム。喋っていることからして多分いい奴。

チャーム「多分つて何よ！？」

「…はあ…！」

ズシャアアアアアン！――――――――！

努「すげー」。

すずか「滝が割れた……。」

篝「よし、」の鮭を持つてこい。」

二人「（滝のことは無視……。）

澪「この柿もいいんじゃない？」

智「でも渋柿かもしだせんよ。」

澪「いいわよ。苦しそむ顔を見れるんなら……。（黒笑）

智「（うわ～～だ～～。）

涼平「よーしみんな集まつたか？それで料理するからな。」

全員「はーい。」

その後、おこしで頂きました。

チャーム「私が出て来たわね。」

鍵宮「私も名前変えて出て来たね。」

チャーム「そりゃ変えなきゃダメでしょ……。」

鍵宮「そうだよね。」

## □章1-3（前書き）

今日ショッピングモール行きました。

スバル「今日ショッピングモール行ってみるか？」

全員「「「贊成！！！」」」

スバル「おおー… さすがはショッピングモール、広いなあ…。」

涼平「はい、じゃあここから自由行動、当たり前だが迷惑かけるな  
」

全員「はーい。」

涼平「じゃ、かいさーん。」

椎名「ねえ、この服どう?」

澪「うん、私はこっちがいい。」

チャーム「あれ? 間長は?」

智「多分ファイギュアかゲーセン。」

チャーム「あ、そう。」

美海一局長は違う、奴の掛け声でしょ!!!

美海一局長なんて語ってるの！？」

# 燐冥 - 何してゐの？

「太鼓の達人で燎原ノ舞とドレー2000の2曲を合わせた得点がどちらが高いか競つて。」

燭冥 やぢゅいちもん 10じやん――「

スバル「あー……疲れた……。」

涼平一腕死んだ。(笑)

燭冥一でどっちが勝ったの?」

スバル「えーと… 240万3000と240万3200… つて微妙

な差で司馬が勝つている……」

燐冥「つーか2曲ともフルコンボかいあんたら……。」

篝「す、こですね。」

アリシアア「いろんな食べ物の店があるわね……。」

ミント「何か買つていいく?」

アリシアア「気になるし……買おつか。」

ミント「いえい!!

愛夢「これもいいな、あーこれもかわいいな。」

涼音「可愛い小物がいっぱいですね。」

涼音「これをあーしてこれをあーしたら……。」

涼「お、お姉ちゃん……なんかあやしい人になつてるよ……。」

姫花「動物さんたちだ。」

シード「あー！チワワだー！」

姫花「どれも飼えませんよ？」

シード「ええええーーーー！」

なんかいろいろ遊んで帰りました。

日常1-4に続く。

□章14（前書き）

狂撃隊のメンバー全員出すの無理だな。

涼平「あ～… 今日も平和だ～…。」

ミント「よつとー。」

涼平「あ、ミント。何しに行つていたんだ?」

ミント「ちよつと精氣を吸いに、ね。」

涼平「へ、へえ…。」

アリシアア「お前また行つていたのか? やめろつて言つていただろ  
う。」

ミント「アリシアアの服が赤く染まつていた。

ミント「あなたも人のこと言えなこわよ。東〇のフ〇ンなの?」

アリシアア「別にいいだろ。」

ミント「良くなこわよ。」

涼平「あはは…。」

椎名「よつとー。」

フレニア「あなたいつも訓練しているね。」

椎名「当然でしょ？」

涼萌「いつもキレイがいいですね~。」

プレニア「次は何するんすか?」

椎名一 電気のパワーを溜めて一気にあそこの不良に放出!』

二十一

「椎名一行くよ。」はあ。

...ΔΔΔΔΔ

涼暖・おわ

「ハレミア、わわわ……」

根本の書

不良「あゝ授業かつたりいゝ」。

バリバリ！！！！！！

バリバリ

不良 一 が あ 」

ハタン！

不良 ぐ……が……ふはあ!!(血を吐いた音)「

「九」名椎

初「よーし、次は『性別が変わる薬』を開発するぞー!」

純「おー！！」

初「まあま〜」の薬といの薬を混ぜて……。」

純「そし〜」うつてうつて……。」

初「……え?」

ボカアアアアアン!――――――

純「けほつ……。」

初「失敗……。」

炎「あー……何でこなことしなくちやこけないのかな……。」

雲雀「いこじやん!」スプレベウ――。」

炎「でもな……。」

涼音「この服がいいな……。」

涼「私はこれ……。」

シード「これ……。」

スバル「もついいか?じゃ、オープソ――。」

ぱああああ……。

クルス「ふはあ！！」

クルスは鼻血を出した。

クルス「こ……これは……3次元と2次元が……一体化した……。」

スバル「分かったクルス。もうそれ以上喋るととんでもない」とになる。」

今日も平和です。

口常1-5（後書き）

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n8395x/>

---

狂撃隊の生活日常

2011年11月24日22時58分発行